

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 353 回 今日が一番最初の日！

2010.2.28

人は変わるために生きている。実年齢に関係なく、人間変化を止めた時から、老後が始まる、停止は退歩を意味すること、古今東西の先人達が語り続けてきた真実である。そうだとすれば、チャレンジして失敗することを恐れるより、何もしないことを恐れるべきであろう。

昨日と同じ今日、今日と同じ明日。現実そんなことはありえないのに、そんなことを願ってしまう。人生に願うことは付きものだけど、そんな願いでは、大切な今日を価値あるものには出来ない。今までやってきたことをし続けるなら、今までと同じものしか得ることはできない。そんなことは多分、みんな解っているのかもしれない。それでも実際は、なかなか変わることが出来ないでいる。チェンジすることの大切さと難しさ、本コラムでも何回となく述べてきた。

この原因はどこにあるのだろう。

かの**ドラッカー**（Peter Ferdinand Drucker、オーストリア生まれの経営学者・社会学者）は「**変化への抵抗の底にあるものは無知である。未知への不安である。**」と語っている。

「無知」は、変化が実践された後のイメージを想像することが出来ない。変化をしないままでどうなるのか、予測も出来ない。「未知への不安」は自分自身の保身と責任回避と、誰か、何かのせいにしたいたいという「逃げ」に他ならない。

「状況が整ってない」「資源がない」と言って他の責任にする人が多い。それでは問題解決になるはずがない。経営者は経済環境のせいにもできないし、社員のせいにもできない筈である。しかし、自信がない時は、自分で自信を持てるような「条件」についていつも考える傾向にある。もうちょっと睡眠が足りていたらとか、他の用事から解放されたらとか、体調がもうちょっと良かったらとか、とにかく、「万全でないこと」を嘆く。残念ながら、「**事に万全で臨めることなんて、一生ない**」と、後になって知ることになるのだが...、とりあえず人のせいにすることに長(た)けている。

今までと同じで、平々凡々と手馴れた仕事をこなすのが、平和で効率も良いと思いついでいる。とにかく彼らにとって、変化は苦痛で平和を乱す騒動ネタなのだ。

でも、現実社会、彼らにとって辛辣(しんらつ)な評価があるのを、ご存じだろうか。それは**ラボック**（Sir John Lubbock、イギリスの銀行家、政治家、生物学者、考古学者）の言葉が物語っている。つまり、

「他人と比較して、他人が自分より優れていたとしても、それは恥ではない。しかし、去年の自分より今年の自分が優れていないのは立派な恥だ！」

もう、いい加減に「変化」へチャレンジした方が彼らのためにもなるだろう。

意識を変えると、できることが変わる。大きくても、小さくても、一步、一步一歩で、すべてが変わる。**過去と他人は変えられないけど、未来と自分を変えられる。**照れない、逃げない、誤魔化さない、自分の弱さと向き合えば、きっと強い自分に生まれ変わることが出来るのである。

そして変化を当たり前の「習慣」にすること。その習慣を身につけることが必要である。そうしないと、体力が落ちるように、変化の能力も衰えてしまう。これこそ真正銘の「老人」である。

昨日と違う自分を創ってみれば、それが今日の「あなた」になる。**今日は、一番最初の日。**あなたの人生の残りの日々で...！ 2010年、**決断し相手が「感動」するまで行動しよう！！**